

2022

地球にいいビジネスを、神戸から。



englobe



目次

- 6 プロジェクト・エングローブとは
- 8 プロセスの紹介
- 9 メンターの紹介
- 10 参加企業とパートナー
- 12 2期生の5つのアウトプット
- カネテツデリカフーズ株式会社
- 株式会社御湯所
- 株式会社垂水重機
- みなと観光バス株式会社
- 合同会社リタリンク
- 23 プロジェクト・エングローブ対談（長井伸晃 x 田村大）
- 28 神戸で見つけた、地球にいいビジネス
- 30 1期生のビジョン実現に向けた着実な歩み
- 31 English Version
- 45 クレジット

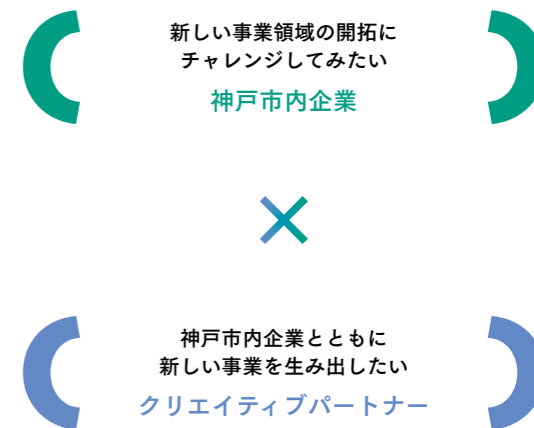
プロジェクト・エングローブとは

「プロジェクト・エングローブ」は、神戸市内の中小企業を中心となって「地球にいいビジネス」に取り組むイノベーション創出プログラムです。気候変動や人権などの問題が地球レベルで顕在化する昨今、ビジネスに求められているのは真に持続可能なビジョンと実現力です。そこで、注目されているのが ESG。ESG は、環境 (E)、社会 (S)、企業統治 (G) を合わせた概念で、地球・社会の持続性を高めながら事業を成長させる指針とされています。本プロジェクトでは、イノベーション創出を ESG 推進と合わせて行うことにより、国内外からの注目・関心を集め、スケールの大きい事業展開を可能にするとともに、神戸の地域産業全体に人材や資本の流れをつくることを目指しています。

E Environment 環境
S Society 社会
G Governance 企業統治

共創からはじまる「地球にいい」ビジネス

この時代、1社のみで完結するビジネスはありません。業種や業界、都市や国などの境界を超えて、多様なステークホルダーとの関係の中で「なぜ今、自分たちがこれをするのか」という社会的存在意義（パーパス）を強く意識し、構想実現に向けてバリューチェーンを編み直す必要があります。「プロジェクト・エングローブ」は、多様な経験とスキルをもつクリエイティブパートナーと神戸市内企業との共創を通じて、このプロセスの構築に取り組みます。およそ半年にわたって、5つの企業が ESG の観点を取り入れながら、ESG 分野の第一線で活躍するメンターの伴走のもと、持続可能な未来に舵を切るための事業構想を練ってきました。



プロジェクト・エングローブのプロセス

2022年度（第2期）のプログラムは、8月にスタートし、次の8つのフェーズ（チーム結成・アセットの棚卸し、パーパスの設定、未来洞察、ビジネスエコロジーの探索、アイディエーション、共感のデザイン、発表、レビュー）に基づき、約5ヶ月間にわたって実施しました。各チームが想い描いた事業案は、神戸市内および東京で関係者や投資家に向けて発表。さらに海外で先駆的なESG活動に取り組む実践者にむけて発信し、ネットワークの拡大につなげていきました。



2021年度参加者（1期生）のフォローアッププログラム

初年度に参加した5企業を対象に、事業フェーズに応じた相談や、専門的知識と経験を有するメンターとのセッションを随時行いました。また、9月には神戸で、1月には東京で進捗を発表しました。昨年度のクリエイティブパートナーが継続して伴走する例も複数あります。1年目に作り上げたパーパス実現に向けて歩み出す2年目を支援することで、「地球にいいビジネス」の新たなエコロジー醸成の加速に繋がります。

メンター紹介

「プロジェクト・エングローブ」では、ESG分野の第一線で活躍するメンターの助言を受けながら、新たな事業領域探索に取り組んできました。



グロンデル・エスペン
Synean 株式会社
代表取締役
デザインディレクター

デンマークの大学でサービスデザインの修士号を取得。その後、日本のデザインエージェンシーの経験を経て、デンマークのヘルスケアイノベーションエージェンシーの子会社の設立と運営に挑む。現在、日本のサービスデザインエージェンシー Synean 株式会社のオーナーとデザインディレクターを務める。



田淵 良敬
株式会社Zebras and Company
共同創業者 / 代表取締役
Tokyo Zebras Unite 共同創設者

日商岩井株式会社（現双日株式会社）を退職後、LGTベンチャー・フィランソपी（リヒテンシュタイン公爵家設立インパクト投資機関）、ソーシャル・インベストメント・パートナーズ、SIIF等で国内外のインパクト投資に従事。米国 Zebras Unite 理事。カルティエ・ウーマンズ・イニシアチブ東アジア地区審査員長。



鳥居 希
株式会社バリューブックス
取締役
いい会社探求

慶應義塾大学文学部仏文学専攻卒業。モルガン・スタンレー MUFG証券(株)に勤務したのち、(株)バリューブックスに入社。グローバルエコノミーを全ての人、コミュニティ、地球のためのものへと変えていく B Corporation™ の認証取得に向けて取り組む。2022年6月、『B Corp ハンドブック よいビジネスの計測・実践・改善』をバリューブックス・パブリッシング第一弾の書籍として出版。



永田 宙郷
TIMELESS 代表
ててて協働組合共同代表
プランニングディレクター

金沢21世紀美術館（非常勤）、デザインプロデュース事務所等を経て現職。伝統工芸から企業の事業開発まで、広い分野において、課題を解決するプランニングとプロデュースを行う。創業400年を超える酒造小嶋総本店との「米糴のあまさけ」シリーズがスタート。



水野 大二郎
京都工芸繊維大学
未来デザイン・工学機構
教授

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 特別招聘教授。Royal College of Art 修士・博士課程修了、芸術博士。日本帰国後、多様なデザインプロジェクトに従事する。津田和俊との共著『サーキュラーデザイン』（学芸出版社）を2022年1月に刊行。

参加企業とパートナー

「プロジェクト・エングローブ」では、5つの神戸市内企業と、国内外で活躍するクリエイティブな人材がチームを組んで、新しい事業領域の開拓に挑戦しました。多様なスキルをもったパートナーの参画によって、創造的なアイデアへと繋がりました。



カネテツデリカフーズ株式会社

創業 1926年の魚肉練り製品の製造会社。海の自然環境を守るため、水産資源保全活動に力を入れている。魚肉でカニやうなぎなどを、本物のような味・食感・見た目に再現した練り物、「ほぼシリーズ」を展開。



株式会社御湯所

有馬温泉の山麓で1191年創業の宿「有馬山叢御所別荘」を運営。400坪の敷地に10室のスイートを擁する。明治開国期からの歴史と無量庵の世界観を融合し、有馬芸妓や阪神間モダニズム等、地域文化振興にも携わる。



垂水重機

株式会社垂水重機

1971年創業の神戸市垂水区の土木建設会社。バックホー、ブルドーザー等の建設機械を保有し、宅地・駐車場の造成・整地や工事現場の施工を担う。建設機械を活用した芸術作品の制作にも意欲的に参加している。



みなと観光バス株式会社

1991年創業の観光バス会社。神戸の路線バスおよび地域密着型のコミュニティバスの開発・運行事業を行う。バスロケーションシステムをはじめ、IoTにも力を入れ、先端の技術開発にも取り組んでいる。



合同会社リタリンク

日本で唯一の自然派純米酒を取り扱う酒専門店を運営。風土と人を活かし、里山文化を持続・発展させてきた酒蔵や無農薬栽培農家を支えるため、「気軽に吞んで環境貢献」を掲げる。

サステナブルな海の資源活用のハブになる

カネテツデリカフーズ株式会社

メンバー

- 白樫 雄一 (取締役)
- 山田 将弘 (原料調達課・リーダー)
- 高殿 晃平 (原料調達課)
- 赤羽 太郎 (サービスデザイナー)
- 西来路 亮太 (クリエイティブディレクター)
- 森岡 拓巳 (プログラマー)

海の資源を "もっと"上手につかう 未来

気候変動による海水温上昇などの影響で世界の漁獲量が年々減少している。そんな中、市場に出回らず廃棄されている「未利用魚」。日本だけでも年間100万トンが存在する。そこで、私たちは「未利用魚」活用のプラットフォームづくりを提案し、これまで漁師の間でしか知られていなかったレシピを広めたり、少量でも欲しい人の元に届けたいというような「点」の活動を「線」で繋いでいくことで、廃棄されていた魚が新たな価値を持って食卓に並ぶような未来を作る。つないだ線が絡み合うプラットフォームを作ることで、魚に関わる全ての人々と海の資源をサイクルに乗せ、これまで以上に豊かな魚食文化を作るとともに、限りある海の資源を次世代に繋いでいくための一歩をここからスタートする。



未利用魚活用データプラットフォーム（神戸モデル）

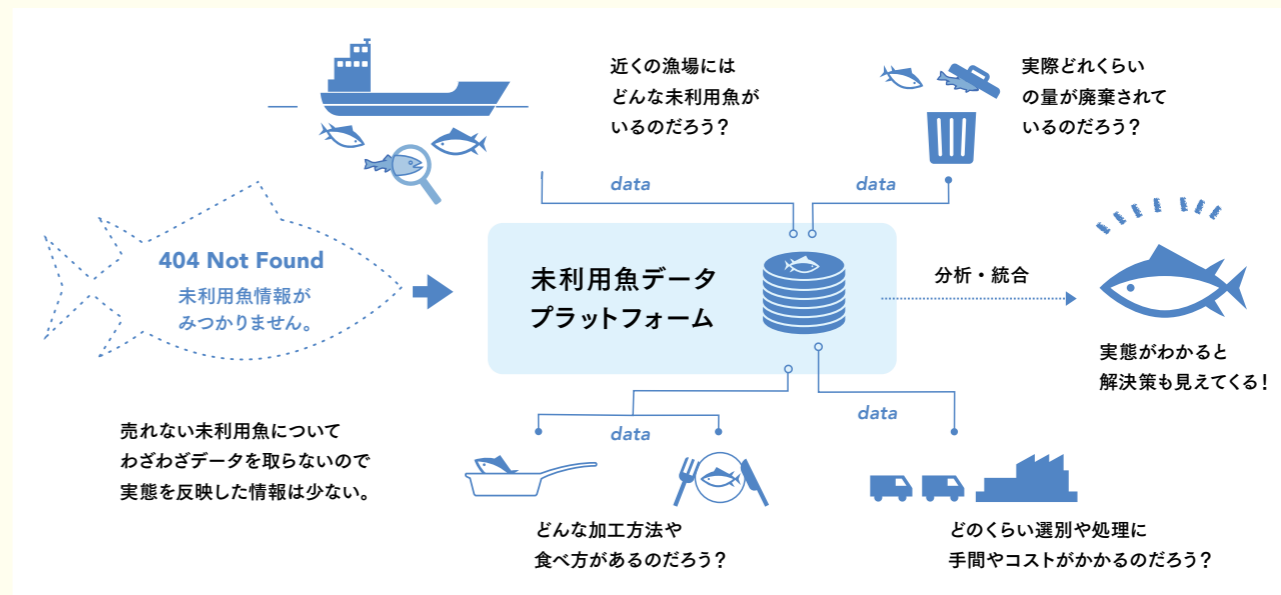
もともと、大量に獲れた魚を無駄なく食べる方法として誕生した魚肉練り製品。魚肉練り製品を神戸で作り続けるカネテツデリカフーズが、未利用魚として市場に載らない魚のデータを集め、とってしまったものの廃棄するしかなくて困っている人と、それをどうにか活用しようという人をさまざまな形で繋いでいきます。



高殿 晃平 / 白樫 雄一 / 山田 将弘



Website



VISION

IDEA

Fostering Timelessness

時を超える「らしさ」を作る

株式会社御湯所

地域の記憶を 共に繋げていく 未来

国内の登録有形文化財は過去30年で200件以上解体されているという。次々と古い木造の建物が取り壊され、マンションに建て替えられるなかで、地域の記憶や歴史的な文脈が失われつつある。私たちは、その土地で長い年月をかけて育まれてきた独自の文化を絶やすことなく、次世代に繋ぎ、その独自の魅力を伝えるべく、地域内外のさまざまなアクターが共に活動できるプラットフォームを作り出す。アートワークショップや地域清掃等のイベントを企画する人々をサポートし、新たな眼差しで文化資源を捉え直すきっかけを作ったり、地域活動をする人・支援する人を繋ぐコミュニティが生まれるような仕掛け作りをしたりして、この動きを外へと広げ、価値を理解し、応援してくれる人を増やしていく。



メンバー

綿貫 一篤	(代表取締役)
綿貫 良宮	(ブランドディレクター 時々女将)
岡本 拓	(エクスペリエンスストラテジスト)
福丸 諒	(デザインコンサルタント)

InSpire

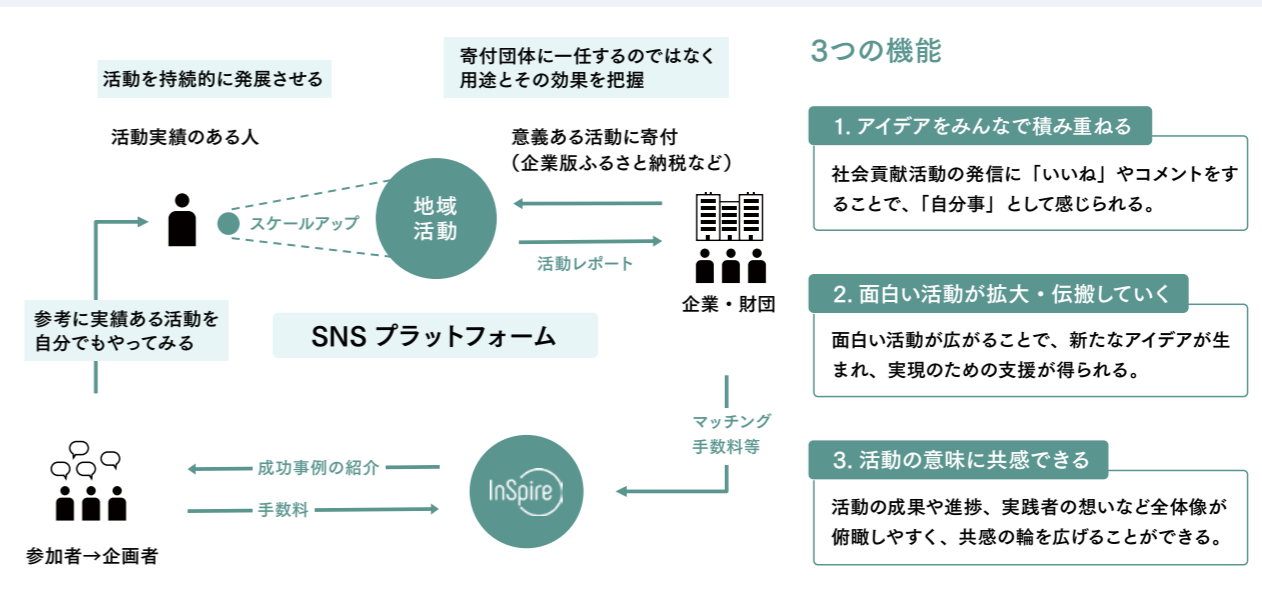
“InSpire”は、文化資源の保全に関心を持つ人々を増やして繋げる社会貢献 SNS プラットフォームです。地域で生まれる活動やアイデアをみんなで積み重ねて発信し、共感を得やすくする機能を持たせます。意義ある面白い活動が育ち、伝播することで、アイデア実現のための支援を得ることにもつながるでしょう。このプラットフォームを通じて私たちは多様なステークホルダーの共創をサポートし、持続的な社会貢献活動の輪を広げることに挑戦します。



綿貫 一篤 / 綿貫 良宮



Website



VISION

IDEA

今を生きる土台をつくる

株式会社垂水重機

ひとりひとりが 誇りを持って生きられる 未来

土木業の担い手不足は深刻な課題である。現場作業員は騒音や粉塵に関するクレームを市民から受けやすく、やりがいや誇りを感じづらいのも一因だ。しかし土木業は本来、公共建造物や施設の基礎工事やインフラの整備を行うのみならず、自然災害で被害を受けた箇所を復旧し、私たちの暮らしを支える、頼りになる存在のはずだ。これからはもっと、市民と土木事業者がやりたい社会の姿をともに構想し、公園やアート作品など地域共有財産を協働して整備するなかで、互いの生き方を知っていくのはどうだろう。それは、多様な価値観や生き方を認め合い、一人ひとりが地域への誇りを持って暮らせる創造的な未来への第一歩となるはずだ。



メンバー

水上 秀一	(代表取締役)
松田 雅代	(ディレクター)
鹿島 清人	(中小企業診断士)
田中 秀典	(中小企業診断士)
長谷部 湧也	(サービスデザイナー)
横山 哲朗	(中小企業診断士)

「生きる」の研究所

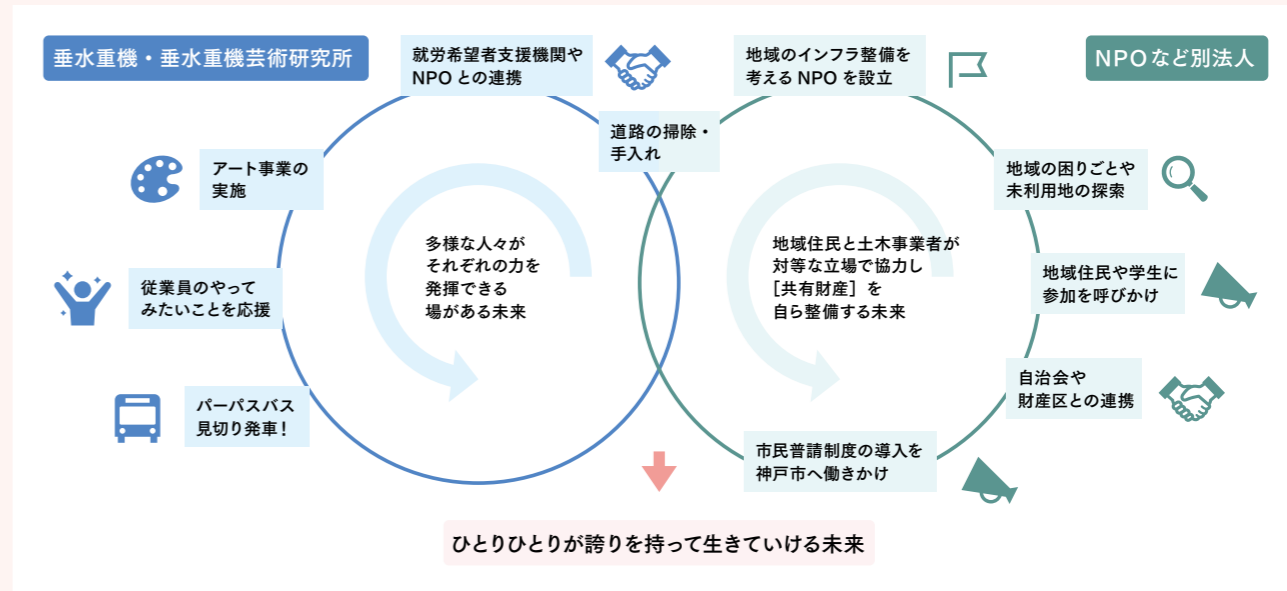
垂水重機は、社内で別部署（垂水重機芸術研究所）や別法人の設立を検討し、それぞれの特性を活かしながら、市民と土木事業者がともに考え協力しあい、地域の『共有財産』を整備する取り組みを始めます。その時間を通じて、お互いの生き方や多様な価値観を認め合い、それぞれがその土地への誇りを持って暮らしていく未来の実現を目指します。



水上 秀一 / 松田 雅代



Website



VISION

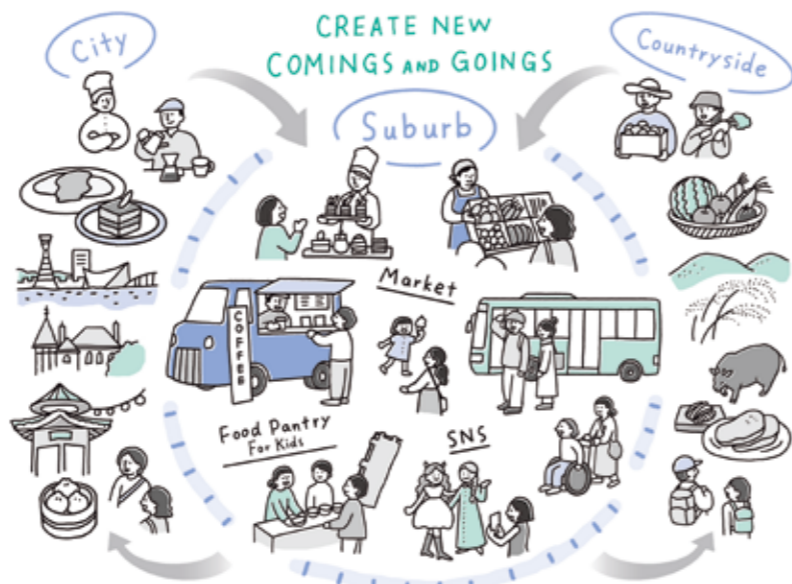
IDEA

「郊外」をハブに、ワクワクを循環させる

みなと観光バス株式会社

（リアルな楽しみが行き交う）未来

新型コロナの影響で社会が硬直し、ライフスタイルが大きく変化した。移動せずとも仕事ができ、人と話せる技術を充実させる一方で、私たちはリアルな繋がりを希求している。こうした時代に、地域を結ぶ役割を担ってきたバス会社として目指すのは、各地の「リアルな面白さ」を循環させるハブになり、地域を超えた「ワクワク」の連鎖を育むことだ。例えば、都市と田舎をつなぐ郊外という場を再考し、田舎から地域特有の果物を、都会からシェフを連れてきてマルシェを企画するなど、その土地ならではの面白さを見つけ、他地域と行き来させるチャレンジを複数走らせてみる。居住地がどこであれ、地域を超えて運ばれる「ワクワク」のエネルギーに人々が感化されるのみならず、コミュニティも有機的に変化していくはずだ。



メンバー

松本 浩之 | (代表取締役)
 島 実里 | (プログラマー)
 中村 優花 | (UX リサーチャー)
 矢本 浩教 | (公認会計士)

みんなの郊外ワクワクプロジェクト

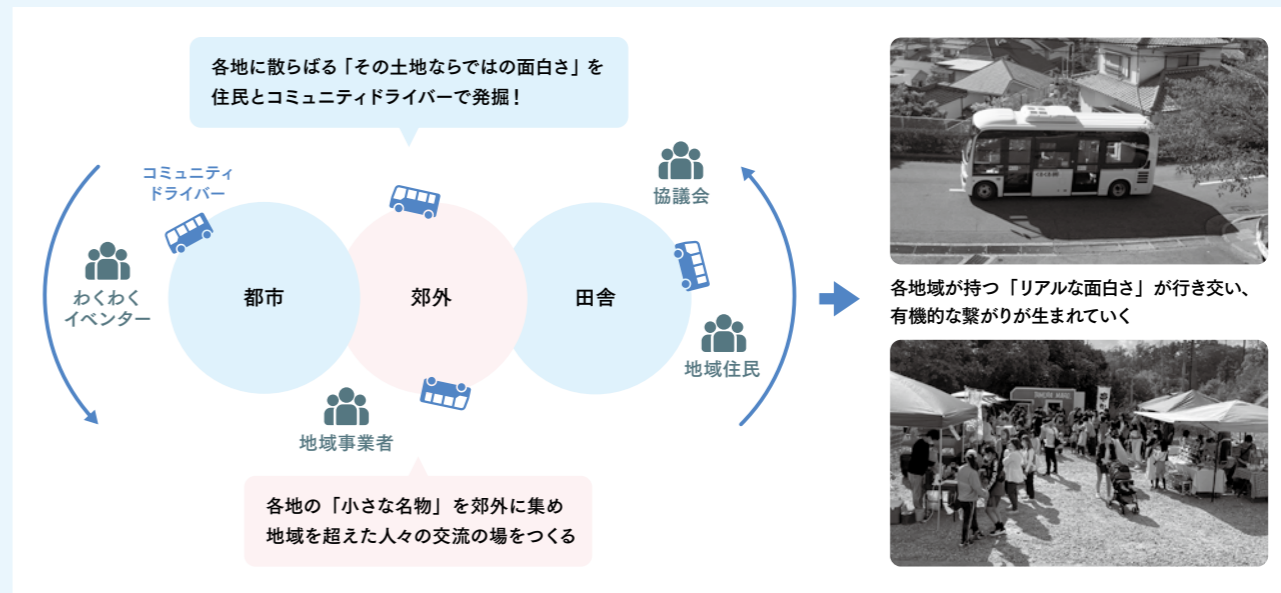
地域に眠る小さな名物を発掘する「コミュニティドライバー」と、小さな名物を集めてワクワクに昇華させる「わくわくイVENTA」を通じて、地域に根差して活動する事業者や団体、住民の間にリアルな繋がりを作り、地域の魅力と活力を育みます。



松本 浩之



Website



Bounce Forward 「発展的復活」

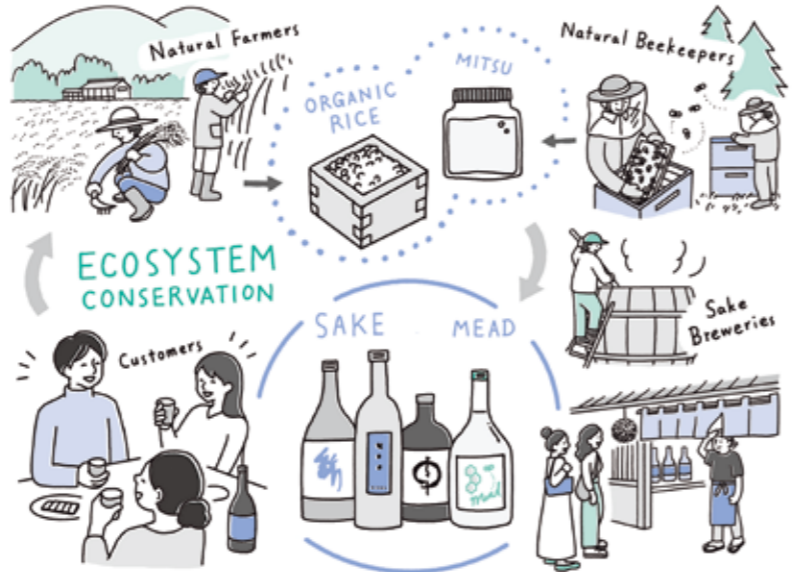
合同会社リタリンク

自然と共生し、
文化が守られる 未来

昔から日本人の生活において重要な役割を担う「酒」。日本各地で豊かな酒文化が開花してきたが、近年は地域の活力減少に伴い、廃業する酒蔵もある。こうした中で、今の時代にあった酒文化を作る鍵は、「自然との共生」にあるだろう。自然養蜂の副産物として出てくるハチミツになりきれず廃棄される「蜜」を有効利用し、酒蔵が持つ発酵技術で造るミード（蜂蜜酒）は、自然環境保護の観点から大きな可能性を秘めている。この「蜜」からミードを造り、流通するためのコミュニティを創り、美味しく飲む機会を増やしていくことで、農家の稲作文化、酒蔵の発酵文化、里山の共生文化を次世代に残すことに繋がってゆく。

メンバー

- 岡 健一郎 | (代表社員)
- 天野 雄一郎 | (クリエイティブディレクター)
- ハレ ローラン | (クリエイティブディレクター)
- バレ アリス | (サイエンティフィックディレクター)



VISION

兵庫ミードプロジェクト

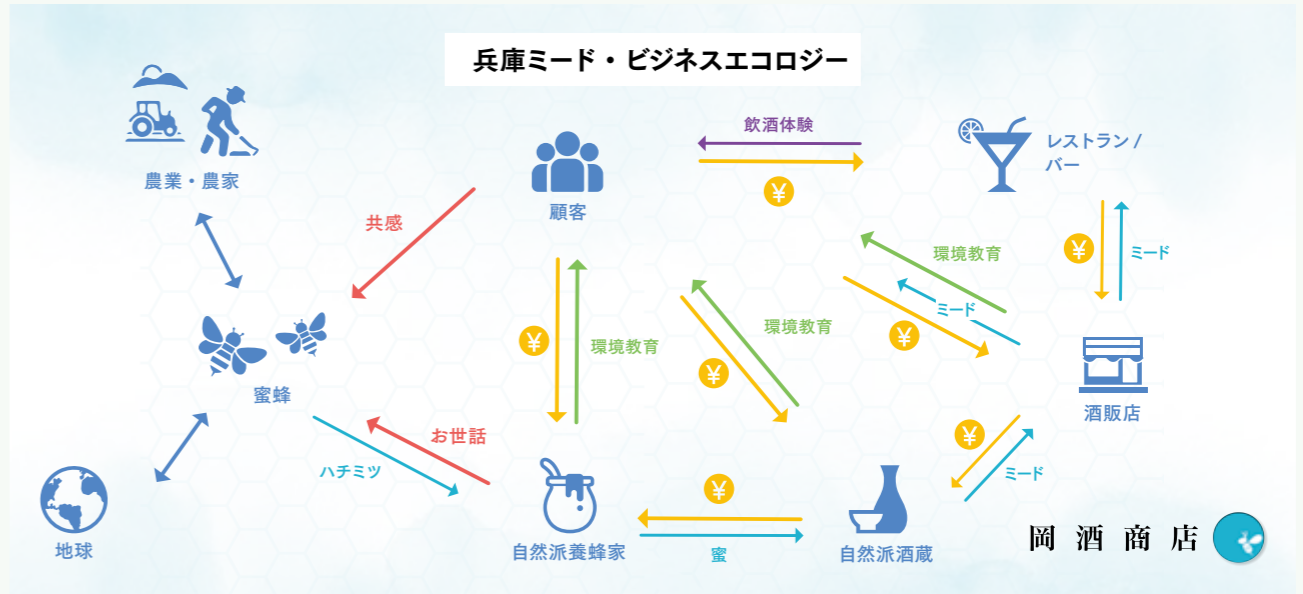
自然農法的共生養蜂の産物で、糖度の観点から蜂蜜になれなかった「蜜」を使って、自然派純米酒を醸す酒蔵がミードを作ります。これにより、養蜂家と酒蔵がともに新しいコミュニティを獲得しながら、地域環境の改善に向けたサイクルを実現します。将来的には、このコミュニティモデルを世界各地に展開します。



岡 健一郎



Website



IDEA



プロジェクト・エングローブ対談

2021年にスタートしたプロジェクト・エングローブ。2年目のプログラムが着地したタイミングで、オーガナイザーの長井伸晃氏と、ディレクターの田村大氏にお話を伺いました。

-プロジェクト・エングローブには、2年間で神戸市内の多業種10社が参加してくれました。長井さんは、どんな所感を持っていますか？

長井： はじめてのチャレンジだったので、最初、私は参加企業のみなさんと同じく、どんな展開になるんだろうと期待と不安が入り混じった感覚でした。この2年間で振り返ってみると、プログラムのピフォーアフターで、参加企業のみなさんの表情やアクションが明確に変化したなど。やりたいことを言語化できるようになったり、プロジェクトに協力してくれる仲間をどんどん巻き込んでいたり。メンターや田村さんが伴走してくれるのが



長井 伸晃
プロジェクト・エングローブ
オーガナイザー
神戸市経済政策課
担当係長

とても心強く、成果としても神戸ならではかつ社会的意義があるものばかりで、チャレンジしてよかったと思っています。

1期生の活躍

- 初年度に参加した5社に対しては今年度フォローアップを実施し、パーパスの実現に向けた歩みに伴走しました。みなさん、めざましい活躍をされていますね。

田村： 有限会社ジョイコーノあためNPO法人てんびんの河野姉妹は、エングローブをきっかけに今の事業を本格始動されたのですが、本当にパワフルな歩みでした。地域のNPOや仲間を集めて前進しており、さすがだなと。パーキンソン病患者と介助者のドキュメンタリーアニメ制作や、バルセロナで行われる世界パーキンソン病大



田村 大
プロジェクト・エングローブ
ディレクター
株式会社リ・パブリック
共同代表

会への参加など、次年度も積極的に進めていくようです。

長井： 取り組んでいるテーマも世界に共通する社会的課題なので、今度のバルセロナもいい目標になりますね。てんびんは神戸市の他プログラムにも参加されて、様々な文脈でも注目され始めています。最近では地元の中学校とのコラボレーションなども進めています。いい意味で遠慮せず頼ってくれるので、サポートのしがいもあります。

- 旭光電機の和田さんは、メンターやクリエイティブパートナーから得た知見により、見える景色が一番変わった人かもしれません。実際にエングローブで出てきたアイデアをベースに、大型資金を獲得されてもいますね。

長井： 素晴らしいですね。このような動きが、

和田さんが所属される神戸市機械金属工業会などの同業種にもいい影響を与えてくれそうです。

田村：和田さんの場合、これまでの大手企業のOEMから自社でビジネスを創っていくフェーズに入り、社外とのコラボレーションやシナジーを開拓していくプロセスだったのかもしれませんが。アルタレーナの八木さんも、コーヒービジネスの次の展開を模索する中でエンגロープに出会い、昨年度チームを組んだクリエイティブパートナーの西出さんに今年も関わってもらいながら、大きく事業体制を変えようとしています。

長井：八木さんからは神戸市に対してもどんどん政策提案いただいていますし、最近は環境省の補助金にも申請されている。それを経済政策課としてサポートできたらと思っています。西出さんとの協働が続いているのはすごく良いですね。彼が今後、神戸で活動する足がかりになると良いとも思っています。

-すでに色々な試みを行っていた企業も、エングロープをきっかけにさらに躍進されましたね。

長井：日本テクノロジーソリューションはこれまで基幹事業の転換を遂げてきた会社です。シュリンクパックという主力事業に加え、新たな事業創出を模索しているタイミングでに参加していただいた結果、NFTを活用して、酒蔵が本当に作りたい酒造りに挑戦できる仕組みを作り、地場産業を盛り立てようとされています。さっそくサービスもローンチされました。

また、マルヤ靴店の片山さんもすでに色々なプロジェクトに取り組みされており、いろいろできちゃう人。だからこそインパクトがあるものが生まれるといいなと思って参加を勧めました。クリエイティブパートナーとして参画してくれた、アートディレクターの福田まやさんを仲間にして、今年も協働をすすめていました。まもなく、パーツが少なく作りやすく修理もしやすい靴の販売がスタートするそうです。プロダクトをつくる時のスピード感はさすがです。



一社ではできないことをどう実現するか？

田村：僕がエングロープで最も大事にしていることは、ビジネスエコロジーの創造です。これはビジネスモデルを作ることとは大きく違います。マルヤ靴店さんが取り組まれている「神戸サイクルシューズ」はその分かりやすい一例です。

この仕組みを実現するには、単に事業者と顧客という関係性ではなく、靴のユーザーとしての市民、履き古した靴の回収拠点、資源再生・販売の拠点、DIY 拠点など、さまざまなステークホルダーが関わってきます。また、靴を循環させるには、靴を容易に分離できる接着技術や、足形を計測し、出力できる光造形技術なども必要です。特定の課題に対して市民や事業者、行政、NPO などがそれぞれの役割・方法で参加し、異なるベネフィットが得られるモデルです。例えば、マルヤ靴店さんは事業収入のみならずインベーターとしての認知度の向上、ユーザーとしての市民は環境貢献ができること以外にもサイズと好みがあった靴が得られること、資源回収をする市役所も新産業の創出や都市イメージアップなどのベネフィットを得られたりするのです。

ビジネスモデルは、顧客と事業者の関係をどう構築するかを考えます。顧客のゲインやペインを捉える提案をして、対価をいただくものですよ。ビジネスエコロジーはこの二者の関係を解体し、多様な関係性をひとつのシステムで包含します。マルヤ靴店さんの神戸サイクルシューズは、顧客価値の実現のみをゴールにしない、サステナブルな神戸の街を作ること自体がビジネスであるということを示していて、エングロープが大事にしている価値観を体現していると思っています。

-なるほど。ビジネスモデルとビジネスエコロジーの違いがよくわかりました。課題への取り組み方を柔軟にすることで、多様なステークホルダーが知恵や技術を持ち寄りつつ参加し、それぞれベネフィットを得られるのですね。

田村：通常、ビジネスモデルを提案すると、不足や欠陥が指摘されがちです。でも、ビジネスエコロジーを提案するエングロープの場合、発表会のコメントが温かい。オーディエンスから新しいアイデアや、あそこ組んだら動き出すんじゃないとか、そういう建設的な話が持ち込まれるのが面白いんです。

長井：そうですね。普通のビジネスピッチイベントとは違うあったかい空気感があるんですよ。今年の東京発表会の空気感は本当にすごかった。

田村：僕はエングロープを通じて、そういう磁場を神戸に作れる気がしているんですよ。

-田村さんはこれまでも日本の別の地域で、地域外からクリエイティブなパートナーを募ってイノベーション創出を狙うプロジェクトを動かしていますが、今回、神戸という土地でやってみてどうでしたか？

田村：想像していなかったことがたくさんありました。まず、参加してくれた神戸の企業がどれもエネルギーで、パワーやクリエイティビティが溢れていることに驚かされました。また、神戸の地域資源の豊かさに驚いています。文化、自然、産業の多様性。それを感じる機会がとて多かったです。普通の政令指定都市とは違う、神戸でしかできないことがたくさんあると感じました。

地域資源をどう活かしてビジネスにするか？

-たしかに去年、プログラムが始まった時点では、地域資源という観点はでていなかったですよ。

田村：魅力あるビジネスエコロジーを作れる街は、地域資源的に豊かな街だとも思うのです。人もお金も価値観の多様性も必要なので、どこでもできるわけではありません。たとえば、長井さんが今年度から始めたオープンファクトリーもそうですが、長田区をはじめ様々な地域にもものづくりの力があり、そこにビジネスエコロジーを展開する魅力と可能性があります。旭光電機さんが神戸市機械金属工業会へ今回のチャレンジを波及させ、業界として変革していくことになれば、そのインパクトは大きい。「ものづくりの街」としてビジネスエコロジーの構築が進むと、掛け声だけのSDGs 推進だけでは生じない変化が生まれます。

長井：実際「ものづくりの街」というイメージは、市民にも外にもそこまで浸透していません。大企業があるのは知られているけど、それって、大企業が求める技術に対応できる中小企業がたくさんあるということなんですよ。そういう人たちが大手の下請けの仕事だけでなく、自身でビジネスエコロジーを作っていけると、神戸独自の価値に

なっていくと思っています。

- 昨年度エングローブをスタートしたときは、田村さんは最終的な目標としてアジアのESGセンターを神戸に形成するような動きも視野にいられたそうですね。実際、どうだったのでしょうか？

田村： ESGセンターはもともと、この事業要件ではありませんでした。ですが、地場企業の個別のイノベーション創出だけでは不十分であることはわかっていて、神戸ならではのスローガンが必要だと考えたんです。神戸市は自治体としてSDGs推進に積極的だったこともあり、旗振りの象徴になるようにこのプログラムを提案させて頂きました。ただ、「ESG」というと平たく聞こえがちで、どこでも誰でも言えちゃう感じがするのですが、これを神戸でやってみたら、よくある優等生的な話だけではなく、街全体の可能性と魅力を作っていくパワーになる。2年やってみて確信しています。その象徴だったのが、2期生として参加してくれた有馬の御湯所さん。御湯所さんの本家は、日本最古とされる創業800年の宿。それがこの街にあることがすごく面白くて貴重です。エ

ングローブを始めるまでは、神戸はなんとなく明治期以降の発展のイメージがあったのですが、文化的蓄積がすごい街だと気づかされました。

2期生への期待

- 御湯所さんは、地域の文化資源の保全にさまざまな人が参画できる仕組みを提案されているんですね。

長井： はい。長い歴史と伝統を背負う御湯所さんならではの視点ですよ。企業だけではなく市民や行政、財団の共創が生まれるプラットフォームができると面白い活動がどんどん集まってくると思うので楽しみです。多様な人が参加できるプラットフォームという意味では、魚肉練り製品の老舗、カネテツデリカフーズさんのアイデアも近いかもしれません。市場に出回らず廃棄されている未利用魚を活用するデータプラットフォームを作って、必要な人に届ける仕組みを考えられています。データを充実させる部分には、釣り好きの市民などの参画も想定されているようですよ。

田村： 市民の足であるバスの会社として、人を運ぶだけではなく、楽しみやワクワクするようなイベ

ントを運ぶハブになろうとするみなとバス観光さんも面白いですね。若いクリエイティブパートナーの知見や体感も取り入れながら、ワクワクする未来を小さなことからでも作り始めてほしいです。

- フランス出身で日本在住のハレさん、バレさんのようなクリエイティブパートナーが参画してくれたのも嬉しかったですね。

田村： はい、リタリンクチームに新しい風を吹き込んでくれました。リタリンクの岡さんはエングローブ参加時からすでにかかなり具体的なアイデアを持っていましたが、核となるパーパス“Bounce forward”という言葉は、バレさんから教えてもらったのだと嬉しそうに話されていましたね。

- 垂水重機さんの場合は、内部に翻訳者がいらっちゃったことも大きかったですね。松田さんにはクリエイティブパートナーとしての参加を目標んでお声がけしたのですが、思いがけず参加企業としてご応募いただき、社長の右腕としてプロジェクトを推進してくださいました。

長井： 垂水重機さんが参加してくれたのは、本

当に大きかったなと思います。水上さんのお人柄でしょうね。関わる人がみんなファンになってしまみたいで、本音で話したくなってしまうんですよね。だからこそ「生きる土台をつくる」というストレートなパーパスを設定できたのだと思います。メンターの鳥居さんも心を掴まれていらっちゃったようです。今後、別法人を立ち上げて、地域の人たちとプロジェクトを推進していくそうで、こちらも今後の展開が楽しみです。

今後に向けて

- 来年度以降、ここで生じた動きはどうなっていくのでしょうか？

長井： 引き続き企業の新しい試みに伴走しながら、ここで生まれた価値をどう社会に届けるかを考えるフェーズに入っていきます。事業化には時間がかかるという認識はあるものの、各企業のアクションが加速するように各所を繋ぎながら応援していけたらと思っています。これまで参加してくれた10社の価値や魅力も発信していきたいですね。彼らが新しい人たちと繋がり、地球にいいビジネスを共創していく姿がまた次のプレイヤーに伝わ

り、神戸がESGビジネスの街として発展していくといいなと思っています。また、クリエイティブパートナーに、神戸で活動することの魅力や地域資源の豊かさを知ってもらう機会を作ろうと考えています。

田村： 最近知り合いのデザイナーと話していて、クリエイターが活動する条件として最も重要なのは、心理的安全性だと教えてもらいました。自分がやっていることを否定せず、興味をもって接してくれたり、何ができるのかを一緒に考えてくれる土地柄とかカルチャーが大事なんだそうです。その入口として、エングローブがあるといいなと。そこから次の神戸像みたいなものが出てくるのではないかと思います。

- 昨年度は日本テクノロジーソリューションの岡田さんが参加者全員を引っ張ってくれて、今年度は垂水重機の水上さんが真っ直ぐな眼差しと剥き出しの心で場を和ませてくださってましたね。そういう空気感もすごくよくて、新しいカルチャーが生まれる気配を感じますね。

田村： エングローブの参加企業は、外の人の



力を借りながら本当に面白いことをしようとしています。特に歴史ある会社は本業からあまり大きく出ようとしにくいことが多いので、こういう動きがある場合は珍しいと思います。ぜひ、一人ではできないことに挑む機会としてエングローブを活用して、神戸にチャレンジしにきていただきたいと思っています。

長井： 特に2期生は次世代の人材確保を課題とする業種も多かったので、エングローブをきっかけに、未来を見据えた企業のチャレンジや想いを知っていただけると嬉しいです。

KOBE 神戸

で見つけた、 “地球にいいビジネス”

プロジェクト・エンגロープ

×

関西学院大学商学部吉川研究室
ESG 経営研究チーム

プロジェクト・エングロープでは、参加企業のイノベーションやビジネス創造のみならず、神戸の街に関わる多様な人たちと、多様なかたちで繋がりがながら、まちづくりや社会課題に取り組み、お互いに貢献しあえる「ビジネスエコロジー」の醸成を目指しています。神戸のサステナブルな未来を担う若い世代にもこの輪に加わってもらおうと、今年度は関西学院大学商学部吉川研究室 ESG 経営研究チームの学生5名と連携。神戸市内で先駆的に ESG に取り組む4つ企業を訪問し、「人」、「地域」そして「地球」として持続可能な文化やビジネスがどう形成されているのか、お話を伺ってきました。



詳細はこちら

持続可能な コーヒー産業への道のり



株式会社アルタレーナ
代表取締役 八木 俊匡さん

循環型 フェアトレードを目指す、“RIO COFFEE”を運営されている八木さん。気候変動の影響による大幅なコーヒー生産量減少の危機を課題に、コーヒーかすの収集や再利用モデルの構築、CO2 排出量を可視化するプラットフォームづくりに取り組まれています。

海外の生産地に足を運んで、実態調査をされる八木さんの行動力と想いに感動しました。美味しいコーヒーが飲み続けられるよう、私たちが活動に貢献したいと思います。



サステナブルシーフードで 食文化を次世代へ繋ぐ



神戸北野ホテル
総支配人・総料理長 山口 浩シェフ

深刻な海洋資源の減少という実態に鑑み、ホテルでの未利用魚活用を積極的に進め、水産業の働き方改善にも取り組む山口シェフ。世界料理評議会ではサステナブル・シーフード活動の行動指針を発表。食文化の維持と持続可能な環境づくりの両立が重要だとお話を伺いました。

次世代のみなさんに!と山口シェフが出版された学術書を戴きました。食文化をどう受け継いでいくのか、サステナブルとは何か、一人ひとりが向き合って考える大切さを学びました。



ICTの力で、社会課題を解決!



神戸情報大学院大学 (KIC)
学長代理 福岡 賢二先生

大量生産・消費・廃棄などのこれまでの経済システムが引き起こした環境破壊や人権侵害問題などを課題に、アフリカをはじめとした多くの地域からの留学生向けの探究プログラムや ICT 教育などの学びの土壌をつくられている福岡先生。アフリカの産業振興や友好促進にも貢献されています。

福岡先生の活動のきっかけは阪神淡路大震災だったと伺いました。航空宇宙産業との共同ベンチャービジネスも手掛けられており、未来を見据え挑戦し続ける姿に強く刺激を受けました!



神戸から循環農業の未来を創る!



弓削牧場
代表 弓削 忠生さん

近隣に流れる乳牛の糞・悪臭の課題に対して研究を重ね、糞尿などの発酵から出るバイオガスを施設内のエネルギーとして利用。発酵残渣の消化液は有機肥料として場内レストランで提供する野菜へ。自給サイクルを生み出し、都市型循環型酪農・農業の可能性を広げられています。

施設内のレストランで、乳製品や野菜を使ったお料理をいただきましたが、とても美味しかったです。持続可能なビジネスと環境づくりに対する弓削さんの熱い想いを体感しました。

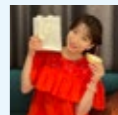


関西学院大学商学部 吉川晃史研究室 ESG 経営研究チーム

2022年度より、ESG 経営の研究をスタートした、関西学院大学吉川研究室の学生チーム。神戸市内の ESG に取り組む企業をリサーチし、経営の背景を知ることで、自分たちの気づきや考えを議論していく。ESG 経営の課題や重要性を理解し、情報発信をしていく。

Team Members

関西学院大学3 回生



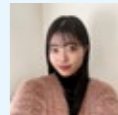
三澤 里佳子



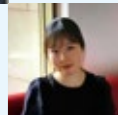
西野 紗奈



小黒 翔平



古妻 未優



伊藤 凛

1期生のビジョン実現に向けた着実な歩み (2021年度参加チーム)

株式会社アルクレーナ

循環型フェアトレードを目指すスペシャルティコーヒーショップ



サステナブルで透明性のある循環コーヒー経済圏の創出に挑戦する
気候変動アクションDAOプロジェクト coffee_way をスタート!

(美味しいコーヒーが飲み続けられる) 未来

旭光電機株式会社

産業用センサ及びコントローラーの開発・設計・製造を手がけるリーディングカンパニー



GO-TECH (約1億円補助) に提案・採択!
脱炭素計測の研究開発を促進

(地球にいいアクションをとりたくなる) 未来

NPO法人てんびん

(2022年4月設立)
誰もが直面する老いや病との向き合い方をデザインする団体



パーキンソン病当事者と関わりのある人たちが
生きる力を取り戻せる場、プラトーハウスプロジェクト始動!

(誰もが彩り豊かに生き合う) 未来

日本テクノロジーソリューション株式会社

フィルム収縮の技術を軸に、パッケージメディア事業を展開



蔵元渾身の酒づくりを支える
NFTを活用したプロジェクト「酒輪」をスタート!

(もっと自分らしく生きられる) 未来

有限会社マルヤ靴店

神戸元町で100年続く神戸で最古の靴専門店



作りやすく修理しやすい循環する靴を制作!
2023年春には販売開始予定

(循環する靴を通じて、作る人、使う人がつながる) 未来



englobe

Co-creating Businesses for People and the Planet from Kobe



Project Englobe

What is Project Englobe?

A locus of creativity and passion, Project Englobe fosters sustainable innovation by empowering small and medium-sized enterprises in Kobe City to create businesses for people and the planet. With pressing socio-economic and environmental issues rampant across the globe, the program helps companies incorporate environmental sustainability, social responsibility, and good governance (ESG) into their business practices. Project Englobe is shaping Kobe City's burgeoning social and sustainable innovation landscape, attracting investment and human capital locally and globally.

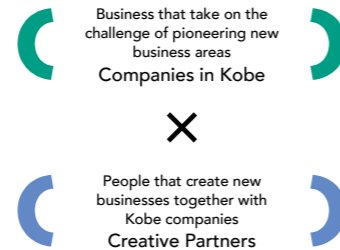
E Environment

S Society

G Governance

Co-creating for People and the Planet

Each year, Project Englobe fosters a thriving community of five companies in Kobe City that collaborate with creative partners that hold various types of expertise. Over the course of 5 months this year, five Project Englobe companies have created innovative business ideas that are dedicated to ESG practices. By engaging a variety of stakeholders across various industry sectors, cities, and countries, the companies successfully defined their purpose, vision, and societal impact. As they turn their vision to action, the companies look to drive change in existing value chain models by integrating sustainable practices.



Why Kobe?

Rich in natural sources and biodiversity, Kobe is a unique port city where the bustle of urban life coexists with tranquil nature. Here, various industries have accumulated to form a distinct landscape in which production and consumption occur in close proximity. Moreover, Kobe City has become the first local government in Japan to issue all bonds in 2021 as SDG (Sustainable Development Goals) bonds. Such qualities make Kobe a promising terrain to cultivate businesses with a commitment to sustainability.



Meet the Mentors

Project Englobe companies explored sustainable business practices with five leading ESG experts.

Esben Grøndal

CEO and Founder, Synean, Design Director

Yoshitaka Tabuchi

Co-founder, Zebras and Company Inc.,
Co-lead, Tokyo Zebras Unite Board Member of Zebras Unite, USA

Nozomi Torii

Explorer of Good Company, VALUE BOOKS Co., Ltd.

Okisato Nagata

President, TIMELESS, Planning Director

Daijiro Mizuno

Professor, Center for the Possible Futures,
Kyoto Institute of Technology

Five Journeys

Let us guide you through the journeys of five different companies.

The First Journey

A Hub for the Sustainable Use of Ocean Resources

Kanetetsu Delica Foods, Inc.

Team Members		
Yuichi Shirakashi	Director	
Masahiro Yamada	Leader, Material Development Section	
Kohei Takadono	Material Development Section	
Taro Akabane	Service Designer	
Ryota Sairaiji	Creative Director	
Takumi Morioka	Programmer	

A Future of More Vibrant Marine Ecosystems

The world's fish catch is shrinking every year due to rising sea temperatures and climate change. Yet many fish that are unable to be sold on the market continue to be thrown away — these “unused fish” are known as *miriyogyo*. In Japan alone, one million tons of *miriyogyo* are discarded annually.

We propose a platform to make use of *miriyogyo*: for example, by sharing recipes previously known only amongst fishermen and supplying fish to consumers, even in small amounts. By connecting these various “points” of all those involved in the marine ecosystem through the “lines” of a digital platform, we hope to foster a thriving culinary culture and pass on the ocean’s limited resources to the next generation, creating a cycle where fish previously marked for disposal can find a new home at the dinner table.



Kanetetsu Delica Foods Inc. Specializing in *surimi* (fish paste products) since 1926, Kanetetsu Delica Foods, Inc. is widely known for their product line that recreates the taste, texture and appearance of real seafood meat using fish paste. Their main mission is the conservation of fisheries resources to protect the marine environment.

VISION

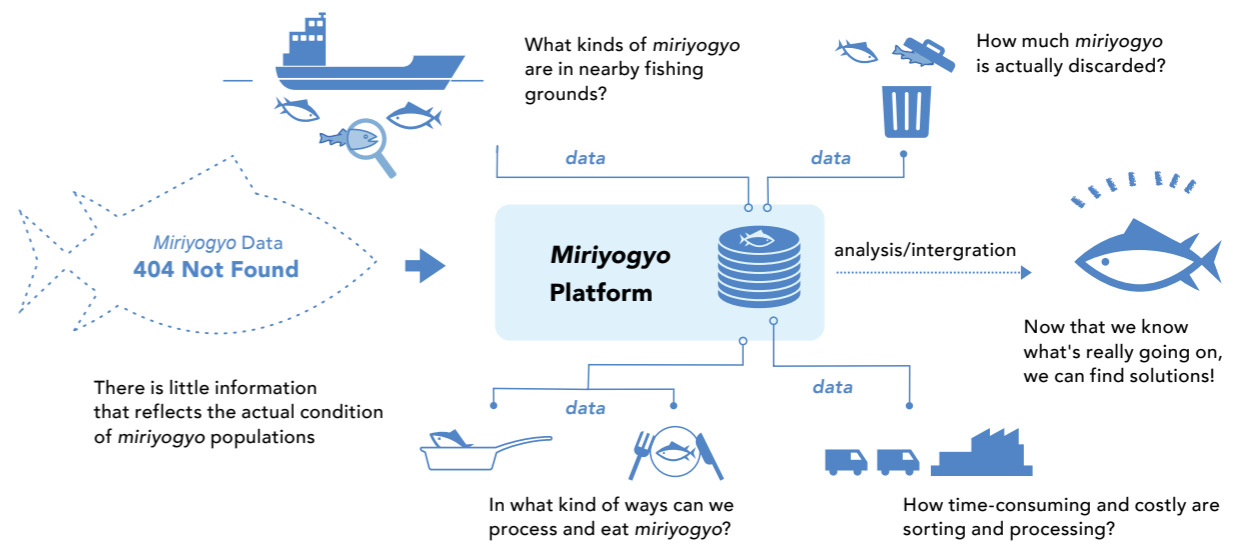
A Data Platform for Using Fish Without Waste (Kobe Model)

Fish paste products were originally created as a way to use all parts of large catches of fish without waste. Kanetetsu Delica Foods, Inc., which continues to produce fish paste products in Kobe, collects data on *miriyogyo* that do not make it to the market to connect people who have no choice but to discard the fish they have caught, with those who are trying to make use of them.



Website

Kohei Takadono / Yuichi Shirakashi / Masahiro Yamada



IDEA

The Second Journey

Fostering Timelessness: Creating an Essence that Transcends Time

Gotosho, Inc.

A Future of Connecting Local Memories

More than 200 registered tangible cultural properties in Japan have been demolished in the past 30 years. As old wooden buildings are torn down and replaced with apartment complexes, local memory and history are also disappearing. We will create a platform where various community actors can work together to preserve unique local culture and pass it on to the next generation. By creating opportunities to reconsider cultural resources from new perspectives and supporting organizers of art workshops, community cleanups, and other events, we connect people and create community. Through broadening this local movement outwards, we also hope to increase awareness of the value of this work and nurture continued support.

Gotosho, Inc. Gotosho, Inc. operates Arimasansoh Goshō Bessho, a traditional hotel founded in 1191. Situated in Arima Onsen, the hotel is a fusion of qualities from the Meiji period (1868-1912) and the Muhōan aesthetic that values creativity unencumbered by existing categorizations. The company is also committed to the promotion of local cultures such as the Arima Geiko culture and Hanshinkan modernism.



Team Members

Kazushige Watanuki	President
Lamyaa Watanuki	Brand Director / Okami
Taku Okamoto	Experience Strategist
Ryo Fukumaru	Design Consultant

Inspire

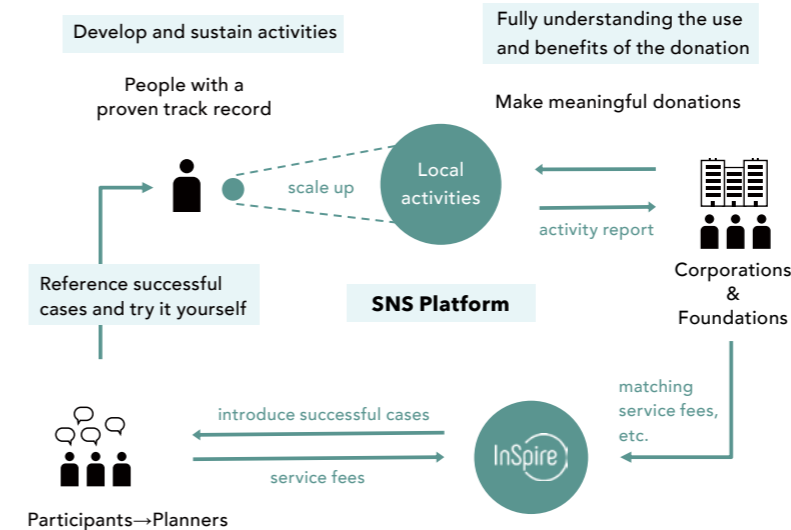
InSpire is a social contribution x social networking platform that connects people interested in the preservation of cultural resources. The platform functions to gather and disseminate community-generated ideas and activities, fostering empathy in the process. As these meaningful and interesting activities spread among more and more people, creators will also gain support for the realization of their ideas. Through this platform, we support the co-creation of diverse stakeholders and expand the scope of sustainable social contribution activities.



Kazushige Watanuki / Lamyaa Watanuki



Website



Three Functions

1. Building Ideas Together

By liking and commenting on social impact activities through social media, users can feel them as "their own."

2. Expanding and Sharing

The spread of interesting activities will generate new ideas and support for their realization.

3. Fostering Empathy

Through a better understanding of the overall progress of activities and thoughts of practitioners, we can increase conversations around empathy.

IDEA

The Third Journey

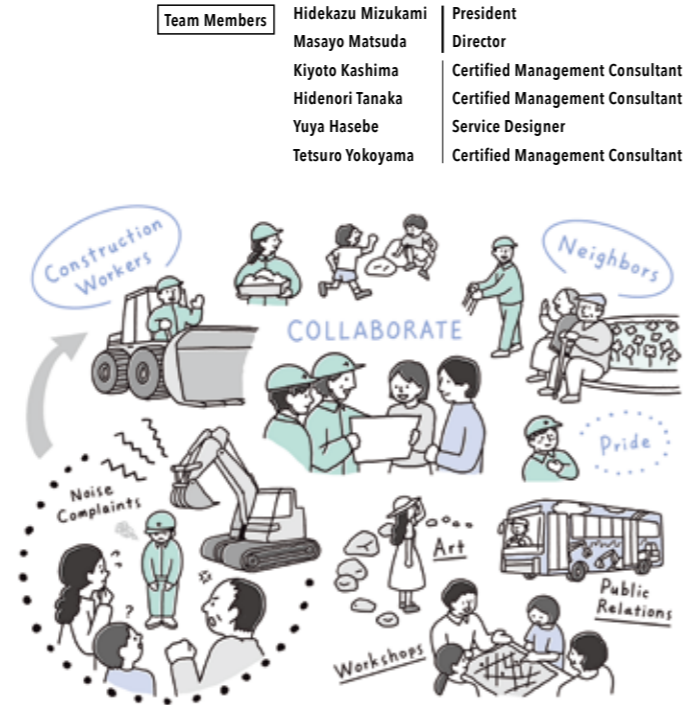
Creating Foundations for Living in the Now

Tarumi Jyuki, Inc.

A Future of (Living with Pride)

While there is a shortage of construction workers in Japan, they are often subject to noise and dust complaints from those living near construction sites, making it difficult for those workers to feel pride in their work. Yet the construction industry forms the backbone of our daily lives by constructing the foundations of public buildings and facilities, improving infrastructure, and restoring areas damaged by natural disasters. We propose that citizens and construction firms work together to envision what kind of society they want to live in – getting to know each other's way of life, collaborating in community maintenance, and creating art works and parks. This would be the first step toward a creative future in which people recognize each other's diverse values and lifestyles, a future where everyone can live carrying the pride of their communities.

Tarumi Jyuki, Inc. Tarumi Jyuki, Inc. is a civil engineering and construction company based in Tarumi Ward, Kobe. They provide services that involve heavy construction equipment, such as site preparation and housing/parking lot construction. The company is also actively engaged in art projects that utilize construction equipment.



Building a Foundation for Life

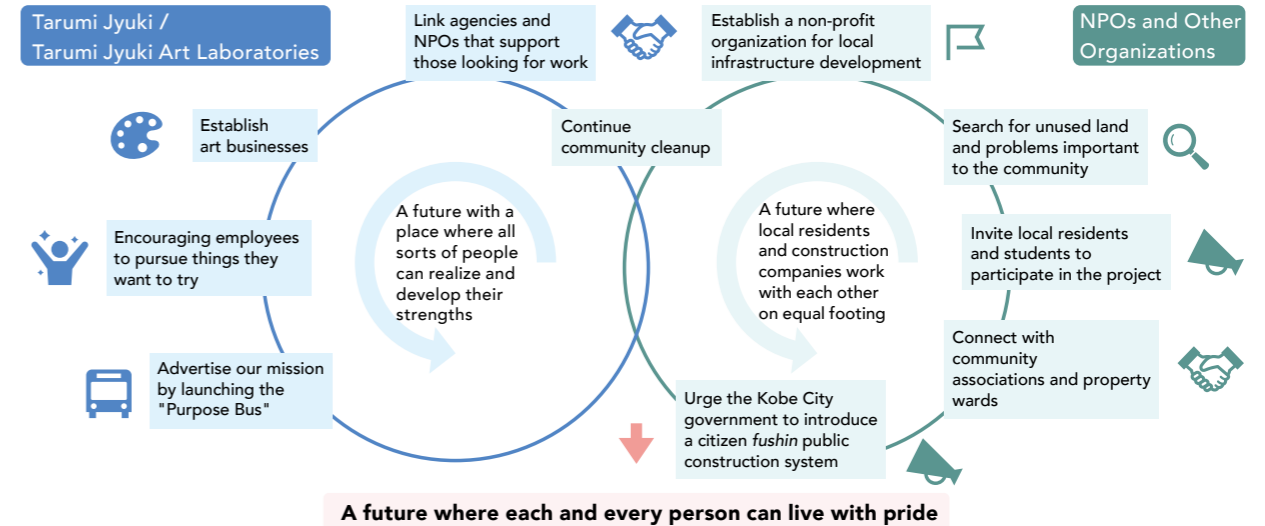
We will consider the establishment of a separate department and/or corporation and begin initiatives to develop common property of the community with local residents and construction firms working together. Through this, we aim to realize a future in which each side recognizes the other's way of life and diverse values, a future where everyone can live with pride on this land.



Hidekazu Mizukami / Masayo Matsuda



Website



IDEA

The Fourth Journey

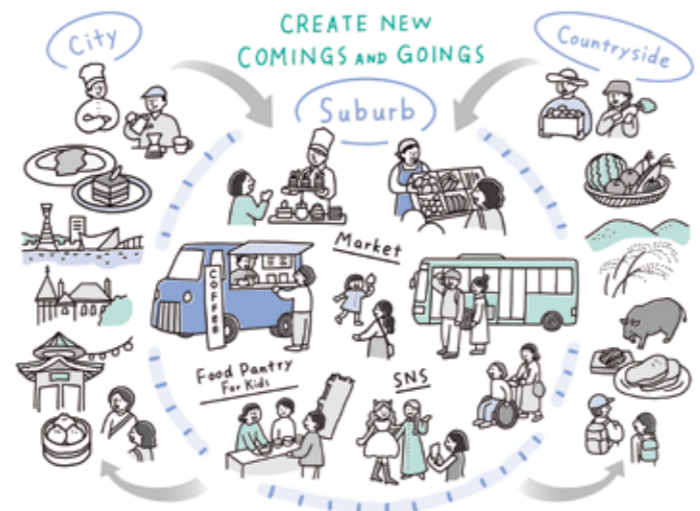
Circulating Waku-waku: Suburbs as Hubs

Minato Kanko Bus, Inc.

A Future of

COVID-19 has brought drastic lifestyle changes. While technologies such as remote work and video calling bring convenience, we still desire real connections. Bus companies, which play a role in connecting regions, have shifted goals as well, becoming a hub that circulates non-virtual, "real-life" fun in each region and fostering a chain of waku-waku (a Japanese onomatopoeia that roughly translates to "excitement" or "sense of wonder") that transcends regions. For example, by reconceptualizing suburbs (which connect city and countryside) and bringing in fruits from the countryside and chefs from the city to organize markets, we can connect regions, leading to an inspiring waku-waku energy that flows across regions, creating organic community change as well.

Team Members	Hiroyuki Matsumoto	President
	Misato Shima	Programmer
	Yuka Nakamura	UX Researcher
	Hironori Yamoto	CPA



Minato Kanko Bus, Inc. A tourist bus company founded in 1991, Minato Kanko Bus, Inc. specializes in developing and operating transit buses and locally oriented community buses in Kobe. Another one of their focuses is the utilization and development of cutting-edge technology, such as a bus location system.

VISION

A Suburban Waku-waku Project For All

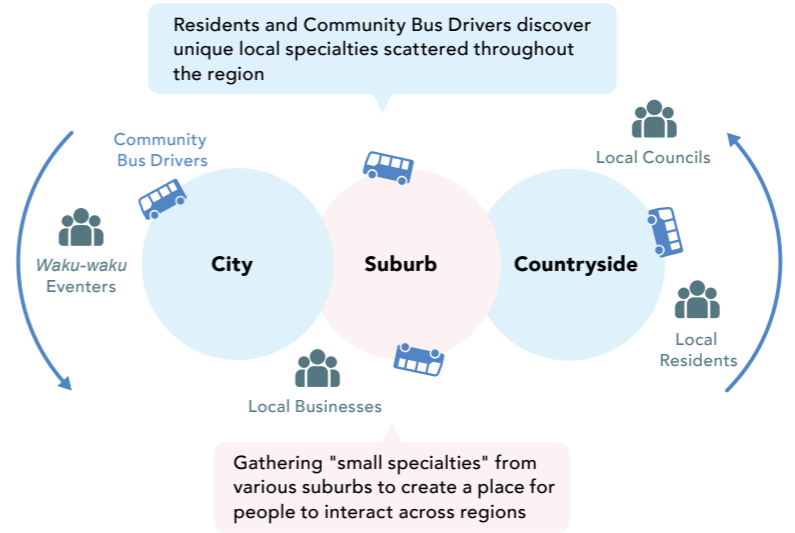
Through "Community Bus Drivers," which discover small local specialty goods lying dormant in the community, and "Suburban Waku-waku Eventers," which gather small local specialty goods and convert them into waku-waku, we create real connections among local businesses, organizations, and residents to foster more lively communities.



Hiroyuki Matsumoto



Website



Creating organic connections by sharing the "real-life" charms of each region



IDEA

The Fifth Journey

Bounce Forward: A Development-Oriented Approach to Restoration

LitaLink, Inc.

Team Members	Kenichiro Oka	President
	Yuichiro Amano	Creative Director
	Roland Haller	Creative Director
	Alice Balle	Scientific Director

A Future of Preserving Culture Alongside Nature

Sake has long played an important role in the lives of Japanese people. A rich sake culture has flourished in many parts of Japan, but in recent years, some sake breweries have gone out of business. Amidst this backdrop, the key to creating a sake culture that adapts to the times lies in a "coexistence with nature." Mead (honey wine) made with sake fermentation technology has great potential from the perspective of environmental protection because it makes use of an often-discarded nectar that is a byproduct of natural beekeeping processes. By creating a community to produce and distribute mead, and by increasing the opportunities to drink it, we hope to preserve cultures of rice farming, sake fermentation, and symbiosis with nature.



LitaLink Inc. LitaLink Inc. runs Oka Sake Shop, the only one of its kind in Japan. Specializing in natural "pure rice" sake or *junmaishu*, (sake without added alcohol or sugar), they strive to support sake breweries and organic farmers who have sustained and developed satoyama town-nature borderland culture. They seek to make environmentally responsible actions easy and effortless through casual drinking.

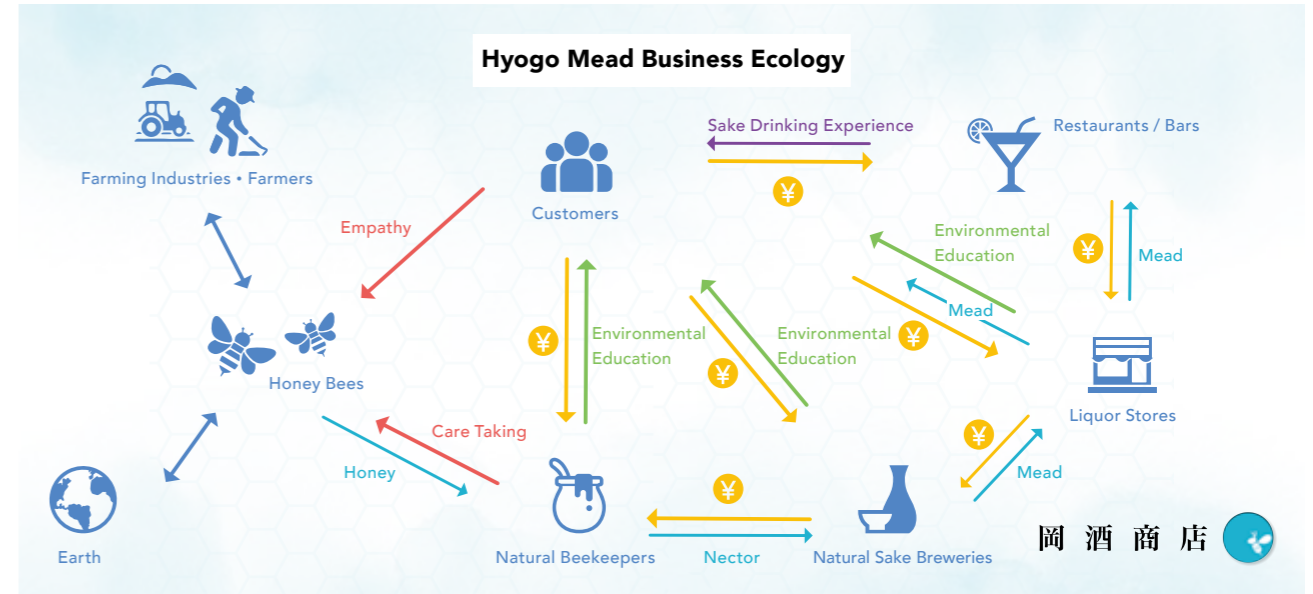
VISION

Hyogo Mead Project

A sake brewery that makes natural *junmaishu* brews mead using a nectar byproduct of natural beekeeping processes that can't be turned into honey due to low sugar content. Through this process, both beekeepers and sake breweries can create new communities while implementing a cyclical model that improves the local environment. In the future, this community model will be expanded worldwide.



Website



IDEA

englobe

主催：神戸市

企画・運営：株式会社リ・パブリック

後援：近畿経済産業局

協力：株式会社みなと銀行

Forbes JAPAN SMALL GIANTS

プロジェクト・エングローブ, 2022

発行日：2023年3月28日

制作・発行：株式会社リ・パブリック

編集：岡 千世、今村 裕美、高坂 葉月、藤 匠汰朗

翻訳：ジョッシュ・フェン、田北 雛子

ロゴデザイン：近藤 聡（明後日デザイン制作所）

ブックデザイン：川路 あずさ

イラスト：笹 紗也子

写真撮影：久保 秀臣（Life Journey Inc.）

小野 奈那子

印刷・製本：有限会社日高印刷

Organizer: City of Kobe

Planning and Management: Re:public Inc.

Supported by: Kinki Bureau of Economy, Trade and Industry

Sponsored by: Minato Bank, Ltd.,

Forbes JAPAN SMALL GIANTS

Project Englobe, 2022

Publication date: March 28th, 2023

Production and Publication: Re:public Inc.

Editorial Team: Chitose Oka, Hiromi Imamura, Hazuki Kosaka, Shotaro To

Translation: Josh Feng, Hinako Takita

Logo Design: Satoshi Kondo, Asatte Design Office

Book Design: Azusa Kawaji

Illustration: Sayako Tachi

Photography: Hideomi Kubo, Life Journey Inc.

Nanako Ono

Printing & Binding: Hidaka Printing Co.

*本冊子は日高印刷の残紙を用いて制作しています。



<https://englobe-kobe.com/>

*Co-creating
Businesses
for People and
the Planet from Kobe*



Co-creating
Businesses
for People and
the Planet from Kobe